

「福祉社会デザイン学研究」の刊行に寄せて

福祉社会デザイン学部長 水村 容子

ようやくコロナ禍は落ち着きを見せましたが、この間免疫力が低下した人間社会では様々な感染症が猛威を奮っています。そして、立て続けに勃発する紛争、自然災害の激甚化や気候変動など、人間社会は相変わらず危機に直面しています。日本社会では高齢化や少子化に歯止めがかからず、人口維持の深刻さが一層増しています。そのような状況下で、新しい福祉社会デザイン学部の紀要は刊行となります。

新しい紀要の刊行にも関わらず冒頭に数々な社会不安を並べ立てましたが、私はこうした課題山積の時代こそ、福祉社会デザイン学部での教育・研究が大きな意味を持つと考えています。新学部の英語名称は“Faculty of Design for Welfare Society”ですが、様々な課題に直面する現代社会において“Welfare Society”とはどんな社会を意味するか？その答えを導き実践として展開することが福祉社会デザイン学部の使命であると私は考えます。この紀要には、今後こうした学部での教育・研究の成果が発表されていくこととなります。改めてここに、社会福祉学科、子ども支援学科、人間環境デザイン学科の教育内容を私なりの解釈も含めて位置付けておきたいと思います。

社会福祉学科は社会福祉学を基礎とし、誰でもその人らしく生活できる共生社会実現に貢献すると共に、国内外の様々な課題に対峙できるグローバルな人材の育成を目的としています。それと同時に、福祉ビジネスなどの分野で新たな事業展開を担える人材の育成も目指しています。子ども支援学科は、子どもと子育てを支え、地域社会づくりに貢献する専門性の獲得や、分野横断型教育を通じた子どもに関わる社会的課題の把握力・解決力の獲得を目標に教育を展開していきます。特に多文化共生社会における保育の課題や保育現場におけるICTの活用などについても学べるカリキュラムが用意されています。人間環境デザイン学科では、建築、生活機器、プロダクトなど生活に関わるあらゆる環境におけるユニバーサルデザインについて、ものづくりを通じて学ぶプログラムが組まれています。デザインの知識や技術を身につけるとともに「すべての人に使いやすい環境」をデザインするため、人の営みを総合的に捉える視点を養うことを教育の目的とする学科です。

現在私たちが暮らす社会は上述の通り、国内外ともに課題が山積し、日本においては人口減少・高齢化が進行している社会を支え、誰もが暮らしやすい持続可能な社会を新たに築いていく必要があります。この「福祉社会デザイン学研究」の刊行を通じて、3学科の専門領域が連携・融合することにより、「人の生活の創造」すなわち福祉社会の実現に寄与することを願ってやみません。